

平成28年度

福祉体験作文

コンクール

作品集



ごあいさつ

このたび、弥富市社会福祉協議会が、法人合併十周年を迎えるにあたり、福祉体験作文コンクールを実施させていただきましたところ、市内、各校より多数の作文が寄せられました。誠にありがとうございました。ここに、優秀作文を作品集としてまとめさせていただきました。どうぞ、お手に取って、子ども達の思いに触れていただけすると幸いです。

生徒（学生）ならではの視点や純粋さ。福祉体験をすることで気づいたことや発見したことに対する率直な思いが伝わり、それぞれが、『福祉』という言葉の意味をおぼろげながら感じているようでした。

『福祉』というものが見えかけてきた世代にあって、本当の幸せが何なのか。自問自答を繰り返すこともあります。それ違うものであり、一人一人の心の中に宿るやしさや思いやりの数だけあります。

しかし、それを表に出すか出さないかで違ってきます。すなわち、行動に移すことが肝心なのです。想いを形にするには、行動しなくてはなりません。

いかに相手に喜んでもらえるか。どうしたら、楽しんでもらえるか。そこには、相手を思いやる気持ちが必ず含まれています。周りの目が気になつたり、恥ずかしかつたりと行動に移せない理由は様々ですが、若い世代には失敗を恐れず、積極的に行動に移してほしいと切に願っています。

人の喜ぶ姿を見て、自分も嬉しくなる。
人の喜びを自分の喜びに変えられる。『福祉』には、そんな魅力があるのでないでしょうか。

この作文を通じて、思いやりのある子たちがいることに安堵するとともに、弥富の福祉が発展することは間違いないと確信いたしております。

作文を書いた皆さんには、この福祉体験で得たものを『あの時、あの頃に感じた気持ち』として育んでいくつてほしいと思います。

平成二十八年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会
会長 八木輝美

平成二十八年度「福祉体験作文コンクール」作品集

① 最優秀賞	本当の幸せな気持ち	桜 小 学 校 六年	山 田 芽 生
② 優秀賞	同じ仲間・いつまでも	弥 富 北 中 学 校 一年	鈴 木 啓 斗
③ 優秀賞	福祉	愛 知 黎 明 高 等 学 校 一年	中 野 夏 蓮
④ 秀 逸	つえと車いすとおばあちゃん	日 の 出 小 学 校 四年	山 田 結 愛
⑤ 秀 逸	介護施設での体験	十四 山 東 部 小 学 校 六年	水 谷 海 莉
⑥ 入 選	はじめてのふくし体けん	桜 小 学 校 三年	加 藤 奏
⑦ 入 選	ボランティアの大切さ	十四 山 東 部 小 学 校 五年	犬 飼 崇 文
⑧ 入 選	心のバリアフリーを	弥 富 北 中 学 校 一年	小 林 義 房
⑨ 入 選	知らなかつた世界	十四 山 中 学 校 三年	小 瀬 水 晴 渚
⑩ 入 選	私が動くことによつて	愛 知 黎 明 高 等 学 校 一年	栗 山 リンダ

☆最優秀賞☆

本当の幸せな気持ち

桜小学校 六年 山田芽生

私は「福祉・ボランティア活動」に取り組みました。私が習っているピアノ教室では、老人施設の方々に向かって、ハンドベルや歌を演奏してプレゼントするという活動を行つてゐるのです。参加は自由ですが、ハンドベルは楽しそうだと思うし、何よりも施設の方々が喜んでくれたらしいなと思ったので参加を決めました。

この活動は、ハンドベルを演奏するのでたくさん練習をしました。みんなで合わせて演奏するのは難しかったけど、とっても楽しかったです。歌やダンスも一緒に練習しました。

この練習の成果を出す日がやつきました。おじいさんやおばあさんが、ニコニコして手をふりながら私の方を見てくださいました。とてもきんちょうして表情が硬かつたけど、少しおうえんしてくれている気がして、表情がやわらかくなりました。ハンドベルをしているときに、手拍子をしてくれたり、歌をいつしょに歌ってくれたりしました。最後に大きな拍手をしてとつてもうれしかったです。何よりうれしかったのは、たまたま聞こえてきた話声です。施設で働いている人が、「今日は子どもが来てくれたけど、すわって見ているのが大変だつたらへやでねいてかまいませんよ。」といふ声に対しても、おばあさんが、「せつかく、きて、くれただから、見て、楽しみたい

わ。

とがらがらでかすれていて、ときどきとまりながら言っていました。イスにすわつて見ているのも大変なのに、私たちのことを見ていたいと言つて下さつてとてもうれしかつたです。他にも、「この子たちに毎日きてもらつて、いつしょに歌いたいわね。」

という声もありました。こんなふうに思つてくれていたんだと知りとても幸せな気持ちになりました。

私はこの経験をして、ボランティアを行うことで幸せな気持ちになることを学びました。私はおじいさんやおばあさんの笑顔を見て幸せな気持ちになりました。おばあさんの話し声からも、おばあさんが幸せな気持ちになつてくれたというように思えました。本当の幸せな気持ちがお互にあるとすべきだなあと想い、ボランティアや福祉がもつと増えたらもつとたくさんの人が、幸せになれるのでいいなと思いました。私ももつと参加したいという思いをもちました。そしてもつとたくさんの人がこのような活動を体験し、ボランティアを行うことで、相手が喜んでくれるだけではなく、その様子も見て、自分も幸せな気持ちになる、ということを、身をもつてわかつてくれたらいいなと思います。

私は、自分がこれからできる事は、何があるのかを考えて、できることをこつこつと続けていきたいと思います。あの素敵なおじいさんとおばあさんの笑顔がまた見られたら、うれしいからです。

☆優秀賞

同じ仲間・いつまでも一緒に

弥富北中学校 一年 鈴木啓斗

リオパラリンピックでは、アスリート達が困難に立ち向いながらも希望をもち一生懸命に戦っている姿がすばらしいと思いました。以前、高齢者や車イスの生活をしている人との交流や車イステニスや車イスバスケットボールを体験したことがあります。

車イスに乗る前はずっと座つていられるから楽だと思つていました。しかし実際に乗つてみた時はうでの筋肉を使い、大変でした。毎日続くと考えると辛いです。車イステニスはテニスをするためだけに作られた専用の車イスを使います。専用の車イスはタイヤがハの字になつっていました。この車イスに乗つて動いてみると、ターンがしやすかったです。しかしボールを打つたら次にボールが飛んできそうな所に走るのは大変です。ただでさえ、ラケットが重たかったので少しきつかつたです。ボールを打つときに車イスから落ちそうになりました。車イスバスケットボールは、普通の車イスでやりました。シューートを決めるだけでしたが座つたままシューートを打つのは予想以上に難しく、シューートを打つ時どうしても立つてしましました。本当の試合になつたらさらにぶつかり合うので、それを考えると「ゾッ」としました。うでの力を上手に使つてシューートできた人が数人いたけれど、ほとんどの人が僕と同じように無意識に立つてしましました。シューートだけの体験だつたけれど、手だ

けを使用してやるバスケットボールは大変で難しかったです。

スポーツのほかにはうでずもうをする所も見ました。

車イスを使つている人は、うでの筋肉がきたえられ、力強くて、皆とても驚きました。

僕には、軽い知的障がいと発達障がいがある妹がいます。現在小学校三年生で支援クラスにいます。一歳になるとまでは他の赤ちゃんと変わらないと思つていたけれど、おとなしいと思うくらい言葉を話すのが遅くて、心配した母が病院に連れて行くようになりました。幼児の時から何度か心理発達テストを受けるうちに妹にある障がいについて、わかつてきました。同じ学年の子達と比べるととても幼いですが、妹なりに一生懸命幼稚園に通い卒園しました。

小学校に入学し普通クラスに入つたけれど授業についていけなくて大変な思いをしながら一年間過ごしました。二年生になる時に支援クラスに変わりました。最初はとまどい不安そうな表情でしたが、だんだん慣れ元気に通うようになつていきました。楽しそうに生活を送ることができていても授業で習つたことをなかなか理解することができ難しく、復習をする時間を多めに作つてもらつています。妹は学習面はともかく、運動会での表現の振り付けは割と短期間で覚えて、自信をもつて踊っていたので僕は感心しました。コミュニケーションをとることが苦手なので、上手に会話することが難しいです。コミュニケーション力をつけるために、いつもおしゃべりをしたり

遊んだりしています。だからいざとなつたら皆と同じように行動することができます。

妹は、悲しくなつたり、嫌な状態になつた時には言葉を出すより先に泣いてしまいます。理由も分からず泣いてしまうと、周りの子達もどうしていいか迷ってしまいます。妹から自然と離れていました。そうなると自分は無視されているとか、一人ぼっちだとか言うようになります。家にいる時はとても明るく元氣で僕に時間が出来ると一緒に遊んでほしいと言つてきます。よくおしゃべりをしたり、わがままを言つたりします。良く言えば自分の思つてゐる事を堂々と言えるのですから、時々本当に障がいがあるのかと思えてきます。学校で自信をもつて、誰にでも接することができるようになつてほしいなと思つています。

支援をしなければ気付かれない軽度の知的や発達障がいは困つてゐることなく普通に思われることがあるので、周りからの対応は難しいと思います。しかし、特別支援学校との生徒と交流して相手を知ることで、差別なくみんな仲良しの社会になると思います。妹が段々と成長していく頃には、日々暮らしていくことが幸せだなと感じることができます。できるような社会になつてほしいです。

☆優秀賞

『福祉』

愛知黎明高等学校 一年 中野 夏蓮

福祉とは何なのだろうか。

ボランティア活動を終えた直後、私の頭の中にはそんな一つの疑問が浮かんだ。今までの私は、「困っている人に幸せを提供すること」が福祉だと思っていた。しかし、今回のボランティア活動に参加して、私の「福祉」に対する考え方ガラリと変わった。

私は今回、七夕まつりのボランティア活動に参加した。このボランティア活動は、障がいを持つた方と七夕まつりを通して、協力し合い、コミュニケーションを取りながら交流を深めるというものだった。私は、この活動を行つにあたつて、「たくさんの人と交流を深める」という目標を立てた。ボランティア活動が始まると、スタッフさんから一緒に活動を行うペアが決められた。私は、車イスに乗つた女性とペアになつた。私はその女性と交流を深めようと思い、挨拶をしたり、質問をしたりとコミュニケーションを取ろうとした。しかし、彼女からの返事は返つてこなかつた。そこで私は、ジエスチャードを使った。しかし、彼女からの返事は返つてこず、私の方へと彼女と交流を深めることができないままボランティア活動を終えた。

私はどうすればよかつたのだろうか。落ち着いて考えてみれば、言語やジエスチャー以外にも相手の表情から

気持ちを読み取つたり紙に書いて会話をするなどの方法

を取れば、彼女とコミュニケーションを取ることができたはずだ。私は、自分の未熟さを痛感した。

そんな悔しさが残つたボランティア活動だつたが、私は多くのことを学んだ。その中でも私は、今後二つのことを大切にしていきたいと思う。

一つ目は、障がいをもつてゐるからといつて差別をしないことである。私は今まで、障がいを持つてゐる方に「怖い」というイメージを抱いていた。なぜなら、小学二年生の頃に、障がいを持つた女性に突然後ろから頭を叩かれたことがあるからだ。しかし、今回のボランティア活動を通して、私の抱いていたイメージとは全く違つていたことが分かつた。私が「怖い」と決めつけていた人達は、とても優しい人ばかりだつたのだ。レクリエー

ションで手を繋いだときには優しく手を握つてくれたり、飲み物を手渡したときには「ありがとう」と言つて私に微笑んでくれた。とても温かい人達だつたのだ。しかし、以前の私のように障がいを持つてゐる方を怖いと思つてゐる人も少なくはない。だからこそ私は、そのイメージを変えていきたいと思う。そのためにも、福祉のボランティア活動に積極的に参加していきたいと思う。

験することが大切である。

私は、今回のボランティア活動で反省したことが二つある。一つは、コミュニケーションを取る手段を言語とジェスチャーの二つに限定してしまつたことである。もう一つは、相手のことを考えずに自分から的一方的なコミュニケーションになつてしまつたことである。この点で私が欠けていたのは、相手のことを考えたコミュニケーションの方法とは必ずしもなつていなかつたことである。具体的な方法として、筆談をする「はい」「いいえ」などで答えられる質問をする、長い文章で話さずに簡潔にまとめるなど別の方法も相手の立場に立つて考えれば、相手の障がいに応じてこれらの方でコミュニケーションを取ることを試してみたい。

私は、今まで「福祉」という言葉の意味を理解できていでいた。しかし、今回のボランティア活動のおかげで私なりの「福祉」の意味を見つけることができた。私の考える福祉とは、私達の障がいを持つた方へ対する思いそのものである。「障がい持つた方達の為に何かできることが何いか」と考えること、「交流を深めるためにはどのようなことをすればよいか」と考えること、その思いこの思いを大切にしていきたいと思う。それが、私にできる福社だと思う。

二つ目は、私たちがどのような姿勢で向き合うべきかを考えることである。障がいを持つた方と交流を深めるためには、どのようなコミュニケーションの取り方が最適なのか。どのようなことに負担を感じるのかということを考えていかなければならないと思う。そのためには、沢山の障がい者の方に接し、実際に自分自身が多くの経

『つえと車いすとおばあちゃん』

日の出小学校 四年 山田結愛

世の中には体の不自由な人がたくさんいます。私のおばあちゃんも十年前に大きな病気にかかり、せきついの手じゅつを受け、ふだんの生活には、つえが必要になりました。遠くへ行く時は、車いすを使います。いすにはすわっても、一人ではその場にたつたり、すわつたりする事が出来ません。おふろも転ぶときけんなので、かいご用のいすを買って、冬でもシャワーだけです。それでもおばあちゃんは、

「つえを使っても歩けるようになつた事がありがたい。」と言っています。夏休みに家族でバラを見に公園へ出かけました。その時、おばあちゃんのために車いすをかりて園内を回りました。私も学校の福祉体験で車いすの体験をしたのでその事を思い出し、かい助してみました。平らなアスファルトの道はスイスイ行けるのですが、やはり子どもの私の力では、大人をおす事は大変だし、コツもわからずむずかしいと思いました。公園なので坂道やデコボコ道が多く、階段は通れないで、スロープから遠回りをしました。今まで車イスの人を見かけてもそのまま通りすぎ、考えた事もありませんでしたが、その時、おばあちゃんの

「つえを使っても歩けるようになつた事がありがたい。」という言葉を思い出し、おばあちゃんの気持ちがわかつた気がしました。

つえは、ゆつくりでもデコボコ道や階段を少しづつでも歩く事ができます。せまい所、特にトイレやおふろに入れる事ができます。

私はおさないころからおばあちゃんがつえを使つているのを見て不思議に思つていました。時にはつえで遊んでみた事もありました。四年生になつて、学校で福祉体験をしてみてつえや車いすは、おばあちゃんの大切な足なんだと知り、つえで遊んだ事がはずかしくなりました。最近では車いすでも使用できるしせつや、車いすをかしてくれるしせつが多くなつたそうで、私は車いすでのかい助の仕方を少しずつでもおぼえて、おばあちゃんといろいろな所へ出かけてみたいです。

それぞれの人が直面する「バリア」を取りのぞく事が「バリアフリー」そしてバリアをのぞくために使われる福祉用具が車いすだと思います。車いすは、お父さんもお母さんも私と同じで福祉体験で使つた事があるくらいで、正しい使い方は知らないと言つていました。だれでも正しく使えて、体の不自由な人も、けんこうな人も協力できる世の中になれば、車いすだからと遠慮することなく、けんこうだからといばる事もなく、おたがいのきよりが近くなると思います。

私一人の力では、何もできなければ、同じ気持ちの人々が、どんどん集まれば、心のバリアフリーができると思します。私は、そんな世の中になれば良いと思います。

介護施設での体験

十四 山東部小學校 六年 水谷海莉

ぼくは、夏休みに母の勤務先の介護施設でボランティアをしました。その施設は、毎日送迎の車で通うお年寄りの人と体が不自由でねたきりの人や脳に障害を持つた人が施設に入院している所です。

ぼくは、その施設でお年寄りの人たちと一緒に歌を歌つたり、手遊び、体操などのレクリエーション時間に手伝いなどをして、お年寄りの人たちとふれあいました。

それから中で初めは少しはすかしくてあまり詰せなかつたけれど、何度も参加するうちに年寄りの人たちの顔

寄りの人たちもぼくの名前を呼んでくれるようになり、うれしくなりました。入院している人の中にはぼくの家の近所の人もいました。今はひいおばあちゃんはもう亡くなりましたが、ぼくがまだ年少のころひいおばあちゃんに散歩に連れられて行つてもらつたときよく畠仕事をして、ぼくに声をかけてくれたおばあちゃんがいたことを思い出しました。母から聞いた事によるとぼくは小さいときから近所のおばあちゃん達にかわいがられてよく遊んでもらつていたそうです。だから、ぼくは小さいときからおばあちゃん子だつたそうです。

ぼくのひいおばあちゃんは、ぼくが生まれた時からおむつ交かんやミルクを飲ませてくれました。ぼくのお母さんは、妹がお腹にいる時に切迫流産で安静にしていな

○入選

はじめてのふくしつけん

お母さんにさそわれて、お母さんの仕事場に行き、ふくし体けんをさせてもらうことになりました。どんな体けんをするのだろうと思いながら行きました。

桜小学校 三年 加藤 奏

ければいけない状態だつたので、育児の手伝いをしてくれていたそうです。ぼくが三歳のとき、病気になり病院に入院しました。病気の状態も悪くなりほんとしやべることも食べることもできない状態になつたとき、ぼくと妹が見舞いにいって、病室で歌をうたつてあげたら、とても喜んで力をふりしぼつて手をたたいてくれたそうです。その翌日、ひいおばあちゃんは息を引き取つたということを聞きました。この体験を通してぼくが思つたことは、ボランティアとは、人のためにするばかりではなく、自分の心も優しくしてくれる貴重な体験であるということを思いました。

最後に、ふれあつた施設のお年寄りの人達が元氣で長生きしてくれるように願いたいです。

まずははじめに、はたらいでいる人たちに、あいさつをしました。

次に、たくさんいるおじいさん、おばあさんたちにあいさつをしました。みんなえ顔であいさつをかえしてくれました。お母さんといっしょに、おじいさんおばあさんにお茶をくばりました。中には、ゆのみではめなくてコップの人もいました。ところのお茶の人もいて、のませてもらっている人もいました。よく見ると、ふつうにイスにすわっている人や、車イスにすわっている人、つえを使っている人もいました。ぼくは、お母さんといっしょに、おばあさんのおふろのじゅんびをしました。次に、けつあつをはかるきかいの使い方を教えてもらいました。させてもらったのに、おばあさんからありがとうございますと言われ、すごくうれしい気持ちになりました。次に、おじいさんおばあさんの、せんたく物をたたみました。食事の時間になり、パタカラ体そういうのをいつしょにしました。まわりを見る

と、まだまだぼくには、できない事がたくさんありました。みんなえがおで「かいご」をしていました。ぼくは、きらきらしているお母さんを見てとてもやりがいのある仕事なんだと思いました。「ありがとう」という言葉の大切さをとてもかんじました。体けんは大へんな事もあってたけれど、すごく楽しかったので、また体けんをさせてもらいたいと思いました。

○入選

ボランティアの大切さ

十四山東部小学校 五年 犬飼崇文

ぼくは、東部小学校の児童会で、アルミカンとペットボトルキヤップ集めのボランティア活動をしました。一番大変だったことは、あまり集まらなかつた事です。アルミカンは、運びやすいように手や足を使ってぺったんこにつぶしました。ペットボトルキヤップは、約八六〇個でポリオワクチン一人分になります。だから、たくさん集められるようにたくさん声かけをしました。ボランティアは、一人でやれる事では、ありません。みんなが力を合わせて自分から進んで社会活動などに、無償で参加する事です。

ぼくは、ボランティアとは、何か調べてみました。ボランティア活動の原則として挙げられる要素は、四つあります。自発性、無償性、利他性、先駆性の四つです。ボランティアは、基本的には、無償性ですが、有償ボランティアが、今は、受け入れられている。ぼくは、有償ボランティアも一定の謝礼を受けられ、お互いが喜べるボランティアを知り、とても良い考えだと思いました。なぜなら、ボランティアは、無償でお手伝いすることが多いので、それがどうという言葉もうれしいけれど、えんぴつ一本でも、心に残る物があれば、ボランティアでがんばったことが思いだせます。

ボランティアには、医師、弁護士、看護師、臨床心理士、教師など、各分野の専門家がそれぞれ高度な技能を

生かしてボランティア活動を行うこうした専門家をプロフェッショナル・ボランティア、略してプロボラと呼びます。

ぼくは、とても素晴らしい事だと思いました。なぜなら、プロの集団がまことに人たちは災害などを受けた人たちの手助けになるなんて、とてもかつていいなと思つたからです。ぼくも、プロになる事は、とても大変な事だけど、プロになつてお手伝いしてみたいと思いました。ボランティア活動でアルミカンリサイクルをした場合、回収した量に応じてしゅうえきが得られます。スクラップ価値の大きいアルミカンリサイクルは、一番値が良いです。ぼくは、その事を知りませんでした。なので、今度からは、アルミカンは、何回もアルミカンに生まれ変わることができる事をみんなに、教えたいと思います。資源の有効利用や地球環境保全にとても大きな役割をはたしています。

最後に、一人一人のボランティアの関わり方には、色々な方法がある事が分りました。ぼくは、みんなに呼びかけます。「大切な資源をみんなで守ろう、安全な世の中に。」

○入選

心のバリアフリーを

弥富北中学校 一年 小林義房

ぼくのひいおばあちゃんは九十二歳です。元気で毎年夏には、畑でスイカを作ってくれます。でも、この夏は寝ていることが多く、少し動くと「疲れたあ」と言つていました。そんなおばあちゃんは、出かける時は「手押し車」が手離せません。家の中でも、かべづたいに歩いたりと、「歩くこと」が段々難しくなってきます。畑までの道も坂道があるのでぐるっと大まわりして畑に向かいます。

ぼくは、小学校五年生の時に「車イス体験」をしました。その時は、体育館で床とマットだったので前に進むことができました。しかし、自分で歩くのと比べると前に進むことが難しく、腕が疲れてしましました。又、段差があると、歩いている時には気付かないような段差でも車イスでは乗りこえることが大変でした。

ぼくの家の周りでは車イスに乗っている人をほとんど見かけません。たまに近所の老人ホームの人人が車イスに乗つて職員の人に押してもらっているのは見かけますが、自分で車イスを運転している方は見たことがありません。自分の家のまわりを見まわしてみると、小さな段差や、きれいで舗装されていない道路、急な坂道と、車イスに乗つている方には、不便な所だと改めて感じました。いなかの道より、都会の道の方がバリアフリーが進んでいました。特に東京は四年後の「東京オリンピック

ク・パラリンピック」に向けてバリアフリー化が進むのではないでしょうか。でも物理的バリアフリーが進んだとしても人の心はどうでしよう。以前、「点字ブロック」のことを学習した時に歩道に勝手においてある自転車のために、目の不自由な方が困っていると学びました。

「バリアフリーの意味を調べてみると、

「高齢者、障がい者等が生活していく上で障壁（バリア）となるものを除去（フリー）すること。物理的、社会的、制度的、心理的な障壁、情報面での障壁などすべての障壁を除去する考え方」

とありました。「ちょっとした段差」「地域格差」「周りから冷たい目」「自分一人ぐらいならいいかというルールを守らない気持ち」「手伝いたいけど、どう声をかけたらいいかわからない」という恥ずかしさ、照れ」：本当の意味でのバリアフリーをはばんでいるのは「人」なのかもしれません。

実際、ぼく自身も、「車イス体験」はしましたが、それはそれで終わつてしまい、ひいおばあちゃんの様子を見るまでは忘れていました。街の中で車イスの人にお会つても「ぼくではない誰かがきっと助けてくれるだろう」と見て見ぬ振りをしてきました。声をかける方も恥ずかしいと思いますが

「手伝つて下さい」

とお願いするの方がもつと声をかけづらいと思います。「物理的なバリアフリー」にするには、お金も時間もかかるかもしれません。でも「心理的なバリアフリー」はどうでしょうか。一人ひとりの心の持ち方で、明日にでも

も変わるものではないでしょうか？でも、人の心は見えません。人は自分にとつて「分らないもの」「身近でないこと」は、つい避けてしまいます。だから、「お互いを知ること」が大事なのです。

「ぼくはバリアフリーとは

「高齢者や障がいを持つた人でも、ぼくたちと同じように生活できること」

だと思います。バリアフリーとよく似た言葉でユニバーサルデザインというものがあります。ユニバーサルデザインは、

「文化、言語、国籍の違い、老若男女といった差異、障がい、能力の何如を問わずに利用する」とができる施設、製品、情報の設計（デザイン）

です。まずは「お互いを知ること」で「バリアフリー」が進み、その先に「では、どうしたらみんなが使いやすいか？」ということで「ユニバーサルデザイン」が進んでいくと思います。心の「バリアフリー化」「ユニバーサルデザイン化」を一人ひとりが心掛けていくと誰にとつても住みやすい「まち」になっていくと思います。ぼくは、この作文をきっかけにまずは「お互いを知ること」から始めたいと思います。

○入選

知らなかつた世界

十四山中学校 三年 小瀬水 晴渚

あなたは、スマホやゲームを一日にどのくらい触っていますか。私は、常に触っている気がします。気がついたらスマホ、ゲームという毎日になっています。そんな毎日を改めて振り返つてみると、家族や友達との会話が減つたと思いませんか。今は、文字で伝えることが簡単にできるようになりました。お互いが考えていることを、ラインやメールで送るだけで相手との会話の必要性がなくなつてきていると感じます。

そこで、今回私は、「音訳」のボランティアに参加しました。このボランティアの活動内容は、弥富市の広報を読み、収録したものを視覚障害を持つ人たちに送る、というものでした。

二日間活動があり、初日には、音訳の会のみなさんと読み合せをしました。そのとき、私は気をつけなければいけないことがあると気がつきました。それは、「発音」です。発音で、一つ一つの言葉も違う意味になってしまいます。例えば、「九市」という言葉です。発音を間違えてしまうと、「急死」という、まったく違った意味になってしまいます。目の見えない人たちにとつては、まったく意味がわからぬ状態になってしまいます。そこで、私は、いつも以上に「発音」に気をつけました。さらに、読むスピード、声量など考えて調節することでより伝えやすくなりました。

音訳の会の皆さんは、ほとんどが大人でした。大人の人ができるなどを、子どもができないということは不思議でした。そこで考えたのは、スマホやゲームが原因の一つではないかということです。前にも書きましたが、ラインやメールは、文字で気持ちを表しますが、ゲームの中でも、知らない人と、同じ仲間として遊べるのに、会話をするときも文字になります。

言葉を発することで、より相手に伝わりやすい言葉を身につけることができると思います。この「発する」行為が減つたことで、伝わりやすい言葉の発音がわからなくなりがちなのではないでしょうか。これを解決するためには、たくさんの人と「会話」することが大切だと改めを感じました。そして、それをくりかえすことで、自分が知らなかつた表現や発音をたくさん身につけることができると思います。

今回、お世話になつた音訳の会のみなさんは、とても温かくて、わからないところは優しく教えてくれました。そして、みなさんに共通していえることは、視覚障害者の方に対しても「思いやり」があることです。私は、少しの時間しか一緒に活動できませんでしたが、「思い」の強さを感じることができました。

「これだと聞きづらいかな。」

「これは、省いた方が伝わりやすいね。」

などこんな会話が飛び交っていました。さらに、収録するときには、失敗したことに気がつくように数人が同じ部屋に入り、チェックしていました。間が開きすぎていいか、雑音が入つていなかを確認し、編集します。

それは、何度も何度も繰り返し行われ、障害者の方が聞きやすいよう努力されています。とても長い時間作業をしましたが、完成したときの達成感が私たちを幸せにしてくれました。とても真剣で、でもどこか楽しそうなみなさんの姿を見て、私もこんな風になりたいと思いました。

この音訳ボランティアで、「私の知らなかつた世界」が広がりました。今まで音訳という言葉すら知らなかつた私ですが、とても興味を持ち、活動することができます。他の皆さんにも、「音訳」の楽しさを知つてもらいたいです。

私は、このボランティアを通して、「会話」の大切さや「相手を思いやる」大切さを発見できました。また、障害者の方達の役に立てる仕事をしてみたいです。新しい自分に出会える良い機会になると思うので、みなさんもぜひ体験してみてほしいと思います。

○入選

私が動くことによつて

愛知黎明高等学校 一年 栗山 リンダ

「福祉」という言葉を聞いて私が一番に思いついたものは、老人の方や障害を持つている方の援助や看護についてでした。

この作文を書くにあたつて、「福祉」と言う言葉の意味をあらためて調べてみました。辞書には『誰しもが満足すべき生活環境』と載っていました。老人の方や障害を持つている方はもちろんですが大人から子供、男性も女性も健常者も病者もすべての人々が満足することのできる生活環境のことを「福祉」と言うのです。

このことを知つて今、何が福祉か考えた時に先日参加した「熊本スタディツアーワーク」のことが頭に浮かんできました。

八月二十二日から二十四日に愛知県高校生フェスティバル主催の「熊本スタディツアーワーク」に参加させてもらいました。主な内容は、被災地の視察、現地の高校生との交流です。愛知から熊本まで約十二時間かけて一番に向かつた先は今回の熊本地震で最も被害が大きかつた益城町です。

その益城町で見た光景に私は我が眼を疑いました。四か月経つた今でもまだまだがれきは片付けられていてなくて足の踏み場がない。まさにそういつた感じだつたのです。私が一番驚いたのは二階建ての家が崩れて一回の部分がつぶされている光景です。地震がきた時、そこに人がいたかもしれない。そう思うとこれからこのスタディツアーワークで学ぶことがすごく怖くなりました。

次にむかつたのは益城町の方が避難所としている益城町総合体育館です。そこで私達が言われた言葉は「安否確認に来たと言えば入らしてもらえる。」バスの中でのこの言葉を聞いた時そんなウソをつかなくても現地の様子が知りたいという気持ちを伝えれば、被災した方々も歓迎

してくれるのはずだ。と思いました。

いざ体育館に一歩足を踏み入れると、私は自分の考え浅はかさに気付かされました。ウソをつくどころかしゃべれない。しゃべるどころかあいさつもできない。そいつた場所でした。考えてみれば、仮設住宅が充分にできていなくて赤の他人と一緒に生活をしているのです。それだけでもストレスが溜まるのに部外者が勝手に入ってきたとなると『見世物にされている』という様に思われても仕方ない、むしろそういうのが普通だろうなと思いました。

その後、熊本城にも行きました。ところどころ石垣が崩れていて、今ではそこに何があつたのか分からない。そんな風に思えてしまう箇所がいくつもありました。熊本県民が誇る熊本のシンボル熊本城がくずれてしまい、ショックを受けている人がたくさんいると思います。時間はたくさんかかるといつも必ず元の姿に戻って欲しいと思いました。

現地の高校生と合流し、共に募金活動もしました。炎天の下、約二時間の募金活動は本当に辛かったです。でもその分お金を投入して頂いた時はとても嬉しかったですし、何よりもこのお金で今日見て来た何かが変わるかもしれない、救えなかつた人が救えるようになるのかもしないとすると、すごくワクワクしました。自分が起こしたアクションによつて人を救えるなんてこんなに嬉しいことは他にないと思っています。

最後に現地の高校生と交流をしました。そこでは当時も今もメディアでは報道されない裏側の部分を知ること

ができました。震源地からの距離で被害の大きさが全然違つたり、水がとても不足していて何時間も待つてもらえる水が一家庭に五百ミリリットルのペットボトル一本だつたり、食べるものも少なくなつて納豆を何日も連續で食べていたり、と私なら耐えられない経験がたくさん語られたのです。でも彼女たちはそれに耐え、もつと被害が大きかつた地域にボランティアに行つたと言つていました。自分に決して余裕があるわけではないのに、ただ純粹に『困っている人を助けてたい』という思いで行動できるのは本当にすごいと思いました。

熊本の高校生は私達に「聞いてもらえて救われた」と言つてくれました。私はこのスタディツアに行く前は『私が行つても被災地の見た目も、被災者の心の中も何一つ変わらないんだろうな、変えられないんだろうな』と思つていました。でもそうじやなかつたのです。誰かのためを想つて行動したことは、結果、自分にとつてものすごくプラスに返ります。そのことがわかつたのです。

今回は特別な話ですが日常生活の中でだつて落としものを拾つてあげる、悩んでいる友達の味方になつてあげるなどという小さな思いやりが世の中にあふれるようになれば「誰しもが満足すべき生活環境」になつていくんじゃないかと思いました。

